



HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---------------------|---|
| Title | J A 女性組織における公益的活動の展開プロセスとその意義 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 小川, 理恵 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(農学) |
| Dissertation Number | 甲第15751号 |
| Issue Date | 2024-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/91874 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Ogawa_Rie_abstract.pdf, 論文内容の要旨 |



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称： 博士（農学）

氏名 小川 理恵

学位論文題名

J A女性組織における公益的活動の展開プロセスとその意義

J A女性組織は、農村部を中心とした女性のくらしと経済的社会的地位向上等の活動で成果を挙げたほか、農産物直売所の嚆矢となった地産地消活動や、高齢者福祉事業の土台となった助けあい活動など、農協事業の新しい展開の基礎活動としても機能を発揮してきた。しかし、高齢化を主因とした活動の担い手の減少により、最盛期には344万人であったメンバー数は41万人にまで減少しており、活動内容のマンネリ化などの課題も指摘されている。とはいえ、地域農業・社会の諸課題への対応に主体的に取り組むことにより、組織活動を活性化させ、地域社会にとっても重要な役割を發揮しているJ A女性組織もみられる。

地域社会との関わりについては、ICA（国際協同組合同盟）が協同組合原則の第7原則で「地域社会への配慮」を謳っており、日本のJ AグループでもJ A全国大会決議等において、地域との接点強化を掲げている。第7原則制定の背景の1つには、日本のJ Aの地域における総合的な事業展開への国際的な関心があり、J A女性組織の活動にも注目されてきた。しかし、近年において活動を活性化させているJ A女性組織では、共益的活動（J A女性組織メンバー間の共通利益を追求する活動）から公益的活動（受益者の範囲が地域社会に及ぶ活動）へ、J A事業とは相対的に独立した公益性を強めてた活動を行っていることに注目すべきである。

そこで本論文では、公益的活動を積極的に展開するJ A女性組織活動の展開プロセスと、活動を展開させた要因を、J Aの機能やJ A女性組織のメンバーの考え方の変化に着目して分析した。そしてそれらの分析結果から、J A女性組織の公的的活動の意義を明らかにするとともに、J A女性組織およびJ Aの公益的活動のあり方に示唆を与えようとするものである。

第1章では、公益的活動の視点からJ A女性組織の展開過程を整理した。J A女性組織立ち上げ当初の1960年代は、J Aの経営改善と女性の生活環境改善が主たる活動だったが、1980年代に入りJ A全体が地域に開かれた組織を目指すなか、J A女性組織で高齢者福祉などのJ A事業と結びついた公益的活動が開始された。しかし1990年代になると、社会に貢献する組織としての展望が強く打ち出される一方で、J A女性組織メンバーの高齢化と多様化が進み、世代間などの考え方の相違を反映した多様な活動が進められる。そのため、J Aの現場における地域社会対応への関心の低さや、地域活動に該当するJ A女性組織活動の少なさが今日の課題として指摘されている。

第2章では、J Aふくしま未来・福島地区のJ A女性組織メンバーへの悉皆調査の結果から、活動に関する意識と行動に着目したメンバーの実像を明らかにした。メンバーが多種多様な資格や趣味・特技を有していること、J A女性組織活動への参加を通じた社会貢献活動への意識が一定程度存在することが明らかとなった。また、参加を通して活動への高評価につながっており、メンバーの資質や関心事を把握し、それを活動と結び付けることの必要性が示唆された。

第3章では、J Aみっかび女性部フレミズグループを事例に、J AとJ A女性部の支援のもと、フレミ

ズグループが新たに立ち上がり、共益的活動から公益的活動へと展開したプロセスの実態を明らかにした。JAみっかびでは若い女性の関係性構築への支援として、2年1期のフレミズカレッジを設立した上で、①フレミズカレッジへ参加を促すフレッシュミズのつどいを開催、②フレミズカレッジでは毎回違うメンバーでグループ化する仕組みの導入と2期連続受講の禁止、③新たなフレミズグループの立ち上げを提案、④フレミズグループの自主的な活動を促進、という段階的な支援を行っていた。JA女性部もフレミズ活動に専念できる支援を行っていた。こうしたJAおよびJA女性部の支援を受けて、フレミズ世代において、構築・深化した関係性を通じた新たな女性組織「みかんちゃん」が設立され、料理教室などの共益的活動から食農教育という公益的活動へと活動の幅が広がっていた。

第4章では、JA高知県女性部大篠支部を事例に、JA女性組織活動が共益的活動から公益的活動へと自発的に展開するプロセスと個人の変化を明らかにした。同女性部では、班横断の二四六九女士会を立ち上げ、全員が必ず役割を持つ決まりを徹底していた。女士会における共益的活動の積み重ねから、メンバーのなかに、関係性の構築・深化、自己効力感や参加意欲・貢献意欲の高まりが生じ、そこから子ども食堂という公益的活動への取り組みの意思が芽生えていた。子ども食堂ではバイキング形式で料理を提供し、参加者とのコミュニケーションからメンバーの新たなやる気が醸成されていた。JA女性組織の自主的運営活動を通して、メンバー間の関係性強化と個々の役割分担の定着から参加意識が強まり、公益的活動への取り組みを進め、その活動への地域の評価から、さらにメンバー内で活動意欲が強くなっている。

第5章では、JA女性組織を牽引するリーダーの実態を、PM理論を用いて検討した。その結果、JA女性組織という基盤があるため、集団の維持を図るM行動に重きが置かれていたことが明らかとなったが、他方で変化や決断の場面では課題の達成に直結するP行動が実行されていたことも注目された。そこでは、伝え方や表現に工夫が施されており、第3章・第4章の活動展開の各局面で、それぞれのリーダーによるリーダー行動が適切にとられていたことも確認された。

終章では、以上を要約したうえで、JA女性組織活動が公益的活動に展開するプロセスについて、その要因を分析した。1つには、メンバーの多様性を考慮・理解した今日的な新たなJA女性組織づくりが重要であり、その組織化の中でメンバー間の関係性が強化されている。2つには、メンバーの個々の能力を正しく把握し、それぞれの活動に対する思いを形にする組織活動の実践が必要である。メンバー1人1人の役割発揮が明確化することで、参加意欲が高まっていたのである。3つめは、地域諸組織との関係性の強化である。食農教育や子ども食堂への取り組みには小学校や自治体との協力がみられ、JA組合員からの食材提供や栽培技術の提供など、公益的活動におけるJAらしさが発揮されていた。4つめはリーダーのあり方であり、JA女性組織という特性から集団維持を重視しつつもリーダーの決断も必要であった。

こうしたJA女性組織が公益的活動に取り組む意義については2点あげられる。1つは、JA女性組織にとっての意義である。JA女性組織が共益的活動から公益的活動への活動の幅を広げることにより、メンバーが活動へのやりがい高め、活動への積極的な参加が実現するなど、JA女性組織が活性化していた。メンバー数が激減し活動のマンネリ化が課題となるなか、公益的活動に取り組むことはJA女性組織の今後の方向性の1つになり得ることを示した。もう1つは、JAにとっての意義である。JAみっかびみかんちゃんの食農教育や、JA高知県女性部の子ども食堂の活動を通して、それまでJAと関わりが薄かった地域住民がJAの存在を強く感じるなどJAの評価の高まりに直結していた。

JAグループは、地域社会における役割発揮を掲げながらも、経営悪化や人員不足により現状では十分な実践には至っていない。そのため、JA女性組織に対しても十分な支援を行うことはできていないが、JA女性組織の独自の運営が地域社会におけるJAによる公益的活動を補っている。そのJA女性組織から生まれた公益的活動を正当に評価することは、JA女性組織の活性化の方向性と同時に地域社会におけるJAのあり方においても示唆的なこととみられる。